

漂流者としての風景

——スマートフォン写真を細密描写する——

博士後期課程 美術専攻

日本画研究領域

学籍番号 1319902

杉本純久

【要旨】



本論文は、筆者による作品《信号待ち》の制作論である。本論文の目的は、本作を事例として、「風景の立ち上がる瞬間」という概念を提示するとともに、それをいかにして絵画で表現するかを理論化することである。

本作は、筆者自身が日常的に生活している、「郊外」の風景を題材とするシリーズである。特筆すべきは、それらは筆者によって意図的に選ばれた風景ではなく、偶発的に出会った風景を主題としている点にある。題材となる風景には、自動車の運転時に会う。郊外では自動車は生活の基盤となる交通手段であり、筆者もまた、日常の移動の大半を自動車に依存している。本作の制作は、こうした運転の中、赤信号で停車した際に、車窓から偶然見えた風景をスマートフォンで撮影することから始まる。写真は構図を一定に保ちながら日々撮り溜められ、その中から1枚を選定する。そしてスマートフォンの画面に表示された画像を見ながら、表現的な加工を一切加えず細密に描き写す、という一連の手順によって制作を行っている。

本作は、一見すると写真を模写しただけの作品とも受け取られかねないが、その制作の目的は、偶然に出会ったごくありふれた風景が、ある瞬間に「立ち上がる」こと、すなわち、私たちの視覚体験において「風景」として知覚される転換点を表現することを試みている。

この「風景が立ち上がる瞬間」は、筆者が「漂流者」という特殊な状態の中で体験した知覚の状態である。本論文において「漂流者」とは、心理的・社会的な「根のなさ」や「足場の不安定さ」を表し、固定化された帰属意識を持たず、安定したアイデンティティを持ち得ない存在を指す。筆者自身は国境を超えた移住経験があるわけではなく、また民族的、性的、身体的にいわゆるマイノリティとされる属性を有しているわけでもない。それにもかかわらず、常にアイデンティティの安定しない感覚を抱えてきた。幼少期には、学校や地域社会といった共同体にうまく適応できず、制度や大衆文化にも馴染むことができなかった。成長するにつれて社会に適応していき、複数の共同体や帰属先を経験するようになったが、そのいずれにも最終的に定着することはなく、むしろ「よそ者」として振る舞うことを、自らの選択として繰り返してきた。このような経験は、本作の制作に深く関与している。

《信号待ち》シリーズは、このような筆者自身の「漂流者としてのアイデンティティ」を表象すると同時に、現代社会におけるリアリティの一断面を表現するものとして現れた作品である。したがって、本論文が取り組む中心的な問いは以下の3点に集約される。

- 1)「漂流者としてのアイデンティティ」とは何か
- 2)「風景が立ち上がる瞬間」とは何か
- 3)その瞬間は、いかに絵画として表象可能か

これらの問いに対して、以下の3章を通して考察を行った。

第1章〈「漂流者」〉では、筆者が経験してきた複数の「社会的カテゴリー」間の移動を、「漂流」という語を用いて位置づけた。カテゴリーごとに異なる価値観が内在するという経験は、筆者に価値観の相対化をもたらし、特定の価値観に過度に固着しない視点が生じる過程を示した。また、筆者の生まれ育ち、本作の主題ともなっている「郊外」の歴史的形成を手がかりに、理想と現実のずれが孕む構造を参照し、価値観の固着を避け、現状を「あるがままに」受け止める姿勢を「漂流者のアイデンティティ」として定義した。本作の制作は、このアイデンティティを表象する実践として位置付けられる。

第2章「立ち上がる風景」では、「風景」の歴史的変遷と、筆者自身の風景観を検証し、新たな風景が生起する瞬間を「風景が立ち上がる瞬間」として定義した。

「風景」とは、特定の価値観を前提とした世界の捉え方であり、価値観の変化はそのまま「風景の変化」として現れる。筆者が「漂流者」として社会的カテゴリー間を移動してきた経験は、そのつど異なる風景の獲得へと結びついており、既存の価値観の枠組みがいったん無効化されて新たな眼差しが立ち上がる瞬間こそが、本論の中心概念となる「風景の立ち上がる瞬間」である。本作制作の目的は、この知覚の転換を表現し、その経験を絵画として再度立ち上げる点である。

第3章〈「漂流者」の表象〉では、この知覚の転換を絵画として表現するための方法論を提示した。新たな風景が立ち上がる瞬間とは、主題と非主題の関係が反転し、「図と地」が入れ替わる瞬間である。写真が持つ、撮影者の意図しない細部までも等価に写し込んでしまう特性を利用し、通常の絵画では省略されがちな非主題的な細部を絵画によって細密描写することで、それを主題化することが可能となる。筆者の制作は、この反転の過程を絵画的操作として再構成し、「風景の立ち上がる瞬間」の知覚的構造を表象する試みである。